



## 第25回国民文化祭・おかやま2010 高梁市実行委員会を設立

### ■問い合わせ

第25回国民文化祭高梁市実行委員会事務局  
(社会教育課内☎@9083)



「第25回国民文化祭・おかやま2010」が平成22年10月30日(土)～11月7日(日)に開催され、県内各地の会場でさまざまな催しが行われます。

市では、「童謡」「神楽」「漫画」の3フェスティバルを計画しており、その開催に向けて、1月30日に高梁市実行委員会を設立しました。併せて各事業の企画委員会を組織し、今後、具体的な開催準備を進めていくこととなります。

この国民文化祭には、県内外から多くの出演者や観覧者の参加が見込まれています。開催機運の盛り上げや高梁らしさの発信など、

市民総参加の文化の祭典を目指し、皆様のご協力をお願いします。

### 市の主催事業

**童謡フェスティバル**…全国から集った童謡愛好者が、子どもから高齢者まで誰もが楽しめる童謡を披露します。

**神楽フェスティバル**…全国の神楽舞の団体が集い、それぞれの地域の特色ある神楽舞を競演します。

**漫画フェスティバル**…全国から募集した1コマ漫画の優秀作品の展示、ワークショップ等を開催します。

## 漫・賀・年賀状コンテスト2009 入賞作品決定!

今年の干支「<sup>えと</sup>丑<sup>うし</sup>」をテーマに募集した「漫・賀・年賀状コンテスト2009」には、全国から908点の作品が寄せられ、漫画家・南一平さんによる審査の結果、入賞作品12点が決まりました。大賞作品と市内入賞者の作品を紹介します(敬称略)。

なお、市ホームページでも入賞作品を紹介しています。

■問い合わせ 教育委員会川上分室 (☎@2203)

### 市外入賞者

#### 〔準大賞〕

松田まさる(72) (千葉県柏市)

#### 〔優秀賞〕

三根 康裕(51) (山口県下関市)  
木下 佳威(39) (奈良県大和高田市)  
勝野 清穂(18) (兵庫県姫路市)  
本田しおん(17) (東京都武蔵野市)  
金澤 文恵(15) (岡山市)  
松原 千夏(13) (津山市)



藤原 通人(73)  
(川上町地頭)



元石 弘子(38)  
(川上町高山)



大賞

伊藤 正美(54)  
(新潟県新潟市)

### 市内入賞者(優秀賞)



嶋池 秋穂(14)  
(備中町東油野)



村上 明日香(12)  
(津川町今津)

## 女子教育に身を捧げた

## 福西志計子③

裁縫学校から  
順正女学校へ

裁縫所で得ていた7円の月収で一家の家計を支えていた福西志計子、木村静は退職しからは、わずか2円を2人で分けるような苦難の時もあったという。彼女らがこのような道を選んだのも、信念に従って自由の境地で女子教育に尽くしたいという思いからであった。この時、志計子35歳、静45歳であった。

当時高梁では、男子には中等教育への動きがみられたが、女子には皆無だった。すなわち、男子には明治12（1879）年に有終館が再建されて、館長として荘田賤夫（霜溪）を招き、明治14年7月成羽町に川上中学校が、12月高梁町に上房中学校が開校し、上房中



志計子作の刺しゅう（高梁高校蔵）

では吉田寛治（藍関）が小学校と掛け持ちで漢学を教えていた。

女子に対する中等教育の必要を認めていない当時としては、この裁縫学校はいずれ消え去るか、うわさされていた。しかし学校は先生2人の熱意と教会員の支持のもとに成長していった。授業では裁縫を教えるにとどまらず、それによつて自活できる人材育成

を目指し、小学校卒業（14歳）後の生徒を3年以上指導した。後年、卒業生は異口同音に、在校中の厳しかった実技教育と、その水準の高さを自覚して誇りとしたと語っている。

生徒は次第に増加し、裁縫学校を創設して半年後の明治15（1882）年7月には校地の黒野宅を買い取り、校舎1棟を建て、同年秋には生徒は90人に達し、学校の基礎は固まっていた。

卒業生の山本充の回想文に、「熱心なクリスチャンたる師は授業の前に聖書の講義をなされて、精神的方面へ子女を導かれた為か、キリスト教反対者は勿論、町の多数の人は反対し迫害した。然し女傑とも言うべき福西先生はひたすら学校に力をお尽くしになり」と述べている。

この間、明治15年4月26日に高梁キリスト教会が16人で発足、福西、木村の2人も教会の有力メンバーとして活躍した。しかし、昔からの宗教・生活を守ろうとする人々は、新しい考えやキリスト教への反

発から、明治16・17年には教会に対し、激しい迫害事件を起こした。このような中においても、裁縫学校は動揺しなかつた。

福西は、教養や徳性を養うには裁縫などの授業だけでは不足と感じ、文学科の必要を痛感し、女学校を創ることを考えた。この思いを強くしたのは、明治16年に読んだマリー・ライオンの伝記であった。マリーは7歳で父を失った後、学

問に励み、24歳で女子教育に熱心な学園に入学、卒業後13年間教師をするなかで、女子のための大学の創設を決意した。無関心や迫害と戦い、この計画に賛同する2・3人の紳士の資金援助を得て、40歳の時達成する。福西は自分の経歴、思いと重ね合わせて、神の

啓示と感じ、女学校設立を決心した。

明治17年8月、京都から高梁教会に応援伝道に来た同志社女学校の藤田愛爾校長の賛意と励まし、森本介石牧師や後援者の賛同も得て、岡山教会の金森通倫牧師に相談と依頼をした。金森牧師の熱心な努力により、当時地方では得がたい女性の文学教師、神戸英和女学校（現神戸女学院）の、原とも女史を先生として招くことに成功、彼女が12月に着任した。

ここに念願がかない、明治18（1885）年1月7日、県下最初の女学校として、文学科を持つ順正女学校が成立する。初代校長として、最初から後援を惜しまなかった柴原宗助が就任した。順正という校名は前述の吉田寛治の命名である。吉田は有終館で山田方谷に学び、江戸に遊学、高梁小学校の主任教諭となり、かつて福西・木村が上司として信頼していた先生である。

（文・児玉 享さん）



柴原宗助の胸像（高梁キリスト教会蔵）